

湖畔の夜：文苑

著者	天花
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 2
ページ	2 5 - 3 1
発行年	1902-05-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/5332

なるが故に燃ゆと言ひ、水の流るるを見ては、水なるか故に流ると言ひ、或は乃公出ですんば蒼生を奈何と大言壯語はよけれども、出づれば蒼生塗炭に陥るを奈何せん。

已んぬる哉、説き去り説き来る痴人の夢よしなくも千言万語を費やし盡す。たゞ是我觀の小照のみ、論にあらず、説にあらず、評にあらず、解にあらず、而して又他の所謂觀にもあらざるなり。之を想へば限りなく、之を論すれば極りなく、愈問題の宏大幽玄なるに驚くのみ。乃ち立て靜かに窓を押せば、夜深くして人定まり、一星長く光を引き、飛んで南に流る。

文苑

湖畔の夜

天

花

空を斜に、颯と風を切つて來た一羽の鳶が、扇のやうな尾を擴げながら、一まじり湖の上で大きな輪を画いて、ゆるく羽ばたきながら、彼方の村に飛んでいつた。

蝙蝠の翼を開いたやうな浮雲も、次第く何處ともなく消失せ、沈みゆく太陽が金色にそめた空は、はや灰色になり、やがて薄黒くなりうめた。

左手の柳の蔭に、膝まで浸つてゐた栗色が、小坊主に曳いてゆかると、其邊に遊んでゐた鳶鳥が二三羽、長い首を伸ばし、鷹揚に四邊を見まわしながら、向うに泳いでゆく。うれもやがて小さい、白いものとなつて、ほの暗いバック、グラウンドに隠れた。

と思ふと直ぐ近くの岸の、水を撫でんばかりに、咲きこぼれてゐる山吹の下蔭では、小さい魚が撥

ねて、後は美しい漣が輪なりにあつてゆく。

今一度名残の光は、ばつと斜に暮れそむる空の一部を紅にして、再びたゆたひながら消れてゆく。紅より淡紅、淡紅より鼠色、それもやがては濃くなつて、空は幽然と暮れてゆくのである。

自分はこの静かなる夕を、湖に臨んでゐる村社の、大きな石に腰掛てゐた。

今闇は漸く其翼をひろげそめて、遠くの方よりたんと迫つてくるのである。

湖越に、何やらいふ山が紫に見えて、ゐたのも暫く、藁屋根や、菜の花や竹林も、れ寺の杏も、たゞしは、彼方の長い堤路の、散りかけてゐる二三本の櫻も、天といはず、地といはず、今までわが眼界の半を形造つて、あらゆる繪の具で、濃く、淡く彩どられてゐたものは、たゞ一刷毛に闇のために黒くされて。

闇は、廣い、漫々たる湖上に展開して來た。

あたり一面に立ちそめてゐる靄と闇ひながら、闇は湖面に這ひながら、四ッ手網も、釣舟も、藻刈も、一切搔き消して了つた。

途端にゴーンと静かに暮れゆく景色を、鐘樓の上で眺めてゐた小僧が撞いたのであらう。空に漂ひ、森蔭にとよみをつくつて、余韻微かにく水を渡つてくる。

ふと心付いて見ると、闇は既に自分の立つてゐる後の森——社を圍んでゐる森の、蟠まれる木の根から、幹から、茂みから、其領分を廣めて、低い枝をくぐり、葉と葉の間を縫うて、微かに私語いゐる梢までも、薄墨色になした。

森が暗くなると、いひしれの香りが四邊にしみ渡つて、冷靜の趣たとへやうもない。

鳥は一切聞かれない。群にはぐれたのでさへ、聲をとめて了つた。

暗くなつた森のただ一團になつて、氣拔に画いた墨繪のやう染め抜いでゐる空には、はや星屑がふつて。

ゴーン！ゴーン！殷々として再び黄昏の寂莫を破る鐘の聲、さながら大海原を捲き行く波のスウエル
のやう、空より空を傳うて、村人に晝のつかれを休むるやう、告げ渡るのである。

見よ、黒ずめる湖上に映じてゐる、あの美しく揺らぐ灯の影を。どんなに平和の相を現はしてゐるだらう。

自分は考えるでもなく、手を拱いで立つてゐた。

物の音一つもしない、寂然と静まりかへつてたこの湖も、長い間闇の手に委せられなかつた。

彼處から、月が出るだらうと思つてゐた空が、先づほんのりと紅くなる。西の空は底光りのする青色を帯びてくる。

自分の立場からは、森に遮ぎられて月の出が分らないが、先づ向うの櫻がはの白う、竹林が美しう輪廓づけられる。お寺の塔も仄かに見ゆたす。靄は消えてゐたが、四邊の景色はさながら吉野紙を透して見るやう。

きら／＼と黒きんだ水の面に、金蛇が走るかと思ふ刹那、光は闇を追ひ、闇は光に追はれて、息づかひする間もなく。やつと今黄昏の村に、其翼を休めたばかりの闇は、光のために追ひまくられて木蔭や廂に潜み、光はにけゆく闇を見送りながら、先づ梢や、葉末の露に挨拶するのである。

光は社の森にも訪づれて。

うよどの風があれば木の葉は搖ぎ、處々に出来た隙からは、雨のやうに光が降り注いで、地上には、彼方でも、此方でも、丸く、白い形が亂れ合つてくる。御手洗や、高麗狗が見ゆる。奉納の手拭の白いのが、二筋三筋ふら／＼とするのも見ゆる。石燈籠もねぼろにうれと分る。廻廊のあたりは一きは暗く、何となく神聖に感ぜらるゝ。

四邊の景色は闇の手を離れて、次第／＼に生々となつてきた。光と闇とが争闘して、天地は再び復活してきたのであつた。

美しい月の光、夢のやうに淡い夕、前には月を浮べてゐる湖が、小波を立てゝゐる。身は森の香満ち渡れる湖畔の趾に佇んでゐる。あまりに美に撲れた自分は、その時與へられた印象を、明かに筆に上すとは出来ない。

自分はちつとしてゐるに忍びないで、社の境内を逍遙し始めた。

折々葉越に深碧の空をうかゞひ、斜に木の間から湖上の月を眺め、樹影ふかい所に踏み入つては立留まり、梢に風の私語ぐのに耳を傾けたり、たゞ夢幻の天地を辿る心地。

何時しか又もどの所にかへつて來た。

既に新しい色彩で隈どられた夜の湖は、たゞ寂然と死んでゐるかのやう靜まりかへつて、人のけはひもしない。

かゝる夜のとても叙べたのであらう。獨逸の詩人の誰かの作に、一人の乙女が月影けふれるライン河畔に立つて、夢のやうに逝いた、いとしき青春の少年を忍び、思ひあまりて遂に其後を追ふたといふのがある。弱い月光を浮べた流は、瀬に碎けながら走つてゆく。水禽か何かが淋しい音を立て

る。四邊は全く静まつて思はますく湧いてくる……忽ち颯と水烟がたつて、月影は千々に碎けた……ラインの川靈は、この美しいヴィクトリムを底深く、永久に秘めたまゝ、忘れたやうに流れてゆくのである。

自分も何となく物かなしう、かの詩中の乙女を忍びながら、頭垂れてゐた。

ふと目をあげて見ると、月は中天にかゝり風も起らぬ波の聲も聞えず。更けゆをまゝに、水のやうな夜氣が身にしんでくる。

まことに静かな湖の眺めではないか。湖の精が人の姿となつて、露けき衣の裾長う、ふわりくんと水の面を飛揚せんと思はるゝばかり。

その湖の精ではあるまいか。月には薄雲がかゝつたので、たゞ一面に白い水の上を、棹さして來るものがある。

向岸の森蔭を今放れたばかり。ふな底を管むる波の、だぶりくといふのが聞える。

舟が湖心に乗り出でたる時、月は再び雲より出でて、眞下に照りくだす。舟は次第に此方の岸へ近づく。自分は眼を放たずにゐた。

一棹させば舟はゆるく進んで、波頭が碎けて白い。又水棹をつき立てる。袖がはぐれて白い腕がちらり。月の光はうの手から流れ下る。

げに湖の精が人に化したのか。たゞしは、悲しき運命を嘆ちて身を沈めた乙女の魂か。かゝる寂しい夜をたゞ一人、湖上を棹さしてくる月下の乙女。

廣々としたこの湖に、動いてゐるのはたゞ一艘。一棹二棹月の光流れ流れて、微かな銀波を後に引

きながら、舟は近づいてくるのである。

黒い髪、白い腕、月の光で融けんかと疑はる、ばかりの姿。さながら、あらゆるものが呼吸をやめてゐる月世界の海に棹さすやう。

舟は何時しか岸に近づいて、五間とは離れてゐない。自分は少なからず驚いたのである。

月を浴びたる衣の夜目にはたゞ白く、艶あるくろ髪は水滴らんばかり。美しい、光と影とで隈どられた姿は、わが前にあらはれた。譬へば、曉の露にぬれた白百合の儘、見るから心も冷め入るばかり。

思やり給へ。夢のごとき此瞬間を。幻のごとき美しい姿を。自分は木蔭に潜んだまゝ、身動きもしない。深い呼吸さへしなかつた。

水面を横に急に烈しく揺れて、がたりと石にあたる音がした。舟ははや岸に着いてゐたので、船側では、波が騒ぐ。

美しい姿は舟を乗すてゝ、枝重くくみ合へる神木の間を、影はちら／＼素足で社の方へ迫つてゆくのである。

御手洗のあたり絲の如き月光がちらりとして、水晶が碎けたと思はれたのは、彼女が手を清めるのであつた。

闇のうちに白い姿が低く短くなつて、遂にその半位に縮んで了つたのは、彼女が狐格子の前に額づいたのであつた。

心のうちで上ぐる禱の聲は、素より自分には聞えないが、かゝる夜に、然もたゞ一人で、何事をか

藏つてゐる。か羅い心の裡には、どんな愁を秘めてゐるのであらうか。

二なき親のいたつきを救はんが爲めか。いとしい同胞の苦みを免れさせたいのか。それとも又その胸のうちは——美しい面影が彫られて、人の知らない思に惱んでゐるのか。

やがて祈を終へて立上つた乙女の、月に向へる顔色は、思ひなしか青白い。

もと來た道をそのまゝ、俯向きながら戻りゆく乙女は、後の地上に細長い、如何にも憐さうな影を曳きながら舟の方へ。心づいて自分は隠場を出でた。しつとりと夜露に濡れた袂をしぼりながら。社を出でんとするとき、今一度木の間越にふりかへれば、淡き影引きはゑたる湖の上、靜かに織れる波の綾を亂しゆく棹の音も、やゝ遠くなつて、白い姿は、ねばるに、かすかに。

或は詩中の乙女のるれに似た運命が、彼女のゆくてに横たはつてはゐまいか。

(完)

漢 詩

清東白臺灣詩卷歌

湖 海 子

星江漁長曰。
起得跌宕。

又曰。說得飄
逸。

又曰。塵腸詩
人當慚死。

又曰。悽絕。

我聞三代詩人不識字。興觀群怨惟言志。尼山之叟嘗刪之。思無邪者天所賜。不知天衣有何媒。雲錦久被人間裁。年垂三千詩三百。讀之有客今朝來。試問紛紛識字人。縹帙屈首志不伸。摸擬釘餽有作意。無乃齷齪失其真。我亦有時詩欲出。一呼再嘆餘怫怫。全詩已溢唇吻間。微吟雖好不下筆。凡今誰是同心友。詩不著字欲出口。出口皆詩無由施。西走北走東南走。我曾西征君南征。異聞壯觀詩滿盈。同仰造化爲詩祖。云是山河結撰成。君今歸來稱南島。七月八月海上好。矯首水天無際涯。轉使征人歌浩浩。却望天山與木岡。一截萬仞立蒼茫。何人躍馬避艱險。蕃社古有卑南王。卑南王之族七